発達障害のある子どもへの言葉のサポート

（社）発達協会　言語聴覚士　**藤野泰彦**

はじめに

本論では、発達障害のある子どもへの言葉のサポートについて、幼児期を中心に筆者の所属する（社）発達協会＊1での指導を通して述べたい。はじめに、当協会の概略を紹介する。

当協会は、1976年に「さざんかの会」として療育活動を開始、その後法人化、クリニックの開設などを経て、現在では医療（王子クリニックの運営）、指導（4つの指導室で行っている療育）、啓発（公開研修会の主催や月刊誌・書籍の発行等）と、大きく分けて3つの事業に取り組んでいる。

当協会で行っている指導の主たる目的は、子どもたちが将来、一人ひとりに合ったさまざまな形で社会的に自立することである。この目的に向けて、それぞれの子どもに合うように家庭と話し合いながら、身辺自立やコミュニケーション、社会生活技能のスキルアップ、また自分から取り組める場面を増やすために、本人の自尊感情や目標意識を高めるような働きかけを行っている。幼児から高校生を中心に、一部、成人も対象に含まれているので、具体的な指導内容は年齢やタイプによって異なるが、幼児期の指導プログラムは運動、机上学習（認知・言語、手指操作等）、身辺自立等で構成されている。

言葉の指導もこのプログラムの中に含まれており、指導のねらいとしては①コミュニケーションの力を高めること、②簡単な判断基準がわかる、など、目標意識を持てるようになるための基礎づくり等である。①、②とも、机上学習のみで達成できるものではないので、指導中のさまざまな場面で取り組まれている。

コミュニケーションの基礎

言葉は人との関わり合いの中で育っていくものである。テレビやＤＶＤ等から言葉を覚える子どももいるが、人との関わり合いの中で覚えていない言葉は、人との関わり合いの中で使えないことが多い。そのため、言葉の指導以前にコミュニケーション、人と関わる力を伸ばすように働きかけている。まだ発話のない子どもはもちろん、発話のある子どもでも、一方的に話すだけで会話にならない子どもの場合、この人と関わる力が未熟な場合が多い。当協会で行っている指導でまず目標とするのが、人からの働きかけに応えることと人に伝えることである。

1）人からの働きかけに応える

人からの働きかけに応えるとはどういうことか。大人の模倣をする、名前を呼ばれて返事をする、お手伝いをしてくれるなど、これらはすべて、人の働きかけに応えている行動である。まず大人の模倣をし、誉められ、そこに喜びを感じ、子どもはさまざまなことを学び始める。できること、わかることが増え、人から評価されてこそ、自尊感情も高められるだろう。人の働きかけに応えられることは、コミュニケーションの基礎であり、またこの基礎ができることで、言葉に限らず学べることの幅、学べる機会が広がっていく。しかし、発達障害のある子どもたちは、人からの働きかけに応えることが苦手だったり、未熟だったりする子どもが多い。

まだ人からの働きかけに応えることがどういうことかわからない子どもで、言葉の理解も未熟な場合、経験的にだが運動場面での指導が伝わりやすいようだ。

「上体起こし（≒腹筋）」という運動種目を例に説明しよう。これは子どもが仰向けに寝て大人が足を押さえ、「起きる」、「寝る」という大人の言葉かけ（＝働きかけ）に、子どもが合わせて動く（＝働きかけに応える）課題である。ポイントは体力づくりではなく、子どもが大人の言葉かけに合わせる、つまり人からの働きかけに応え、応えれば評価されるというやりとりである。また大人の言葉かけに合わせることで、言葉（音声）に意味があることにも気づいていくはずだ。

ではなぜ、人からの働きかけに応える練習をする時に運動がよいのだろうか。それは、粗大な動きと言葉（＝大人からの働きかけ）を結びつけることが、机上の学習場面よりも多くの場合、子どもには理解しやすいことと、理解しやすい分、子どもが実感を持ちやすいからである。また子どもが応えてくれない時も、大人は介助して正しい動きを作ればよいので、ルールが明確になるという利点もある。ときどき街中で、お母さんが「待ちなさい」といってその先に逃げ回る子どもがいる風景を見かけるが、お母さんの言葉の意味を理解してふざけているならともかく、言葉の理解の未熟な子どもがこのような状況を繰り返すと、「待ちなさい」＝「大人から逃げること、もしくは追いかけっこ」になってしまうだろう。

2）人に伝える

指導中は、さまざまな場面で大人に報告をする練習を行う。自分の使ったイスを片付けた後、机を準備した後、着替えが終わった後など、さまざまな指導場面で取り組んでいる。おしゃべりをする子どもには、「先生、できました」というように伝えるが、発話のない子どもには、大人の肩をトントンと叩いて呼びかけ、サイン（身振り）で伝えるよう働きかける。

また食事中、お茶のお替りが欲しい時なども、勝手にお替りをさせるのでも、大人が様子を察してお茶を足すのでもなく、大人の肩をトントンと叩くように促し、「先生、ちょうだい」と言葉やサインで伝えるよう働きかける。発達

障害のある子どもは、大人に「この子には言ってもわからないだろう」と決めつけられ、周囲から「親切」にされていることがある。すると、子どもの視点に立ってみれば、生活の中で人に何かを伝えなければならない場面が減り、標準的な発達の子どもよりも言葉のやりとりを学ぶ機会が少ないという場合がある。

子どもに伝えたい言葉

言葉の指導をする上で、一般的な言葉の発達、知的能力の発達を踏まえて行うことは大変重要である。当協会の指導でも、年に1度、指導時間内に標準化されたテストを行ったり、クリニックのリハビリテーション室と連携したりして、さまざまな視点から子どもの状態を把握するように努めている。

1）人と関わるために必要な言葉

子どもの全体的な発達、言葉の発達段階をつかみつつ、日々の指導場面では、これまで述べてきたように、まずは人からの働きかけに応える力、言葉ではなくても構わないから人に伝える力を伸ばすよう指導している。そしてこれらの力を固めつつ、子どもたちには、「一緒」や「待つ」、「ちょうだい」や「ありがとう」など、人と関わる上で必要な言葉を実際の行動とともに伝えている。先生と「一緒に」運動、いただきますまで「待つ」、食事時間に使う消毒液を「貸して」「どうぞ」というような言葉やサインのやりとりを入れながら貸し借りすることなどである。子どもが社会の中で暮らしていく上では、園や学校の先生や友だちと「一緒に」行動できたり、待つべき時間は「待つ」ことができるようになるための言葉を伝える指導が大切だと考えている。これらの言葉を学んでこそ、大人とのやり取りや、子ども同士の関係の中から多くの言葉を学んでいけるはずだ。これら人と関わっていくために必要な言葉を1冊にまとめた本が、最近、出版されている。興味のある方は参照されたい(2)。

2）判断基準を持つために必要な言葉

人からの働きかけに応えられるようになってきた子どもには、「マル」や「バツ」など2分法の簡単なものから、判断基準につながる言葉を伝えている。もちろん言葉だけではなく、サインやシンボルなど、その子どもにわかる形で導入する。

これも初めは、運動場面での指導が子どもにとって理解しやすいようだ。「キャッチボール」を例に説明しよう。指導ではボールを落とさずキャッチできたらマル、落としたらバツというルールで行っている。初めは大人がマル、バツを伝えるが、徐々に子どもにも表出を促し、子ども自身が考えるように働きかける。

まだカタコトも話すか話さないかの子どもに判断基準につながる言葉を教えていくのは、将来、自分の目標を意識できたり、自分で自分の目標を持てるようになってほしいからである。目標がわかるためには、まずは自分がしたことを自分で評価しなければならない。評価するためには、マルバツ、同異概念、数、好き嫌い、いい悪いなど、さまざまな判断基準を持つ必要がある。

大人がいなければ判断できない子どもは、大人が側にいれば様々なことができても、任されると困ってしまう場合が多い。いつまでも受身なままで、自分からやる、といった自主性が育ちにくいことがある。これでは自立につながらないだろう。幼児のうちから自分で判断し、目標を意識し、そこへ向かって努力するような働きかけをしていきたい。

おわりに

子どもの持つ言葉の力は、単にその語彙数などでは量れないように思う。家庭や園・学校で暮らし、学ぶ時に、また将来、社会の中で、たとえ部分的にでも自立するために必要な言葉を持っているか、使えているのか。このような視点から、日々の指導の中で言葉の役割や持つ力を考え直している。

参考文献

(1)：(社) 発達協会ホームページ　http://www.hattatsu.or.jp/

(2)：『子どもが伸びる関わり言葉26　発達が気になる子へのことばかけ』湯汲英史・著（すずき出版）